

支援活動における「組織化」について

2005 年春学期「総合 3-6」実践報告

狩野倫子・村上まさみ

概要：本稿では 2005 年度春学期「総合 3-6」の実践報告として、特に新たな試みとして行った TA によるクラスの「組織化」から支援に焦点を当て考察を行った。筆者らはこれまで 3 期に渡り実習生、サポーターと異なる立場で「総合活動型日本語教育」（以下、「総合」）の教室実践に関わってきた。そしてこれまでの学びを振り返り具体的に把握するために、05 春学期総合 3-6 の活動に参加し、ティーチングアシスタント（以下 TA）として教室実践に関わった。そして過去の活動における反省から支援集団のネットワーク形成を主眼に置き、そのために必要と思われる媒体と仕組みの提示を試みた。その結果、支援の組織化とはネットワークやコミュニケーションの仕組みを作ることそのものではなく、教室コミュニティーに参加するもの同士が、一人一人の目標達成を目指すプロセスに関わり互いに尊重しあうことのできる土壌を形成することから始まるのではないか、というひとつの学びを得るに至った。

キーワード：支援の組織化，コミュニケーションの土壌

はじめに

本稿では 2005 年度春学期「総合 3-6」において行った新たな試みとしての TA によるクラスの「組織化」について考察の対象とした。まず筆者らの本活動に関わるにあたっての動機を述べ、新たな試みとしての「組織化」とその内容について触れる。そして「組織化」の実施とその結果について支援の観点から考察を加える。

1 2005 年度春学期「総合 3-6」

1.1. 筆者らの「総合 3-6」とのかかわり

本報告は、実践研究科目実践研究 (9)「言語文化教育実践研究」における「総合 3-6」のクラス活動における実践を取り上げる。早稲田大学大学院日本語教育研究科は、日本語教育実習として実践研究科目が設置されており、同大日本語研究教育センターの日本語科目との連携科目となっている。本報告で取り上げる「総合 3-6」クラスは、コーディネーターの細川が設計した「総合」の実践が実習生によって運営される。そこで実習生は「総合」の実践を経験的に学びながら、支援者として「総合 3-6」クラスの活動に参加することが課題となっている。

筆者らは言語文化教育研究室の在籍生として、一期目の 2003 年度秋学期に実習生として「総合」に参加した。以来、学習者の思考と表現活動のサポートを行う役割 (サポーター) をもって、毎期の教室活動に参加してきた。活動に関わるに従い、「総合」の理念が具現化された「総合 3-6」の実践において学習者の思考と表現を活性化させるためには、支援者 (TA/ サポーター) 自身が「総合」の理念をいかに自分のものとしていく

かということ、そして支援者間の理念の共有が重要な鍵になるのではないかということを感じてようになってきた。なぜなら総合の理念が具現化された「総合3-6」においては、先述の通り支援者は学習者の思考と表現の活動に主に直接かかわるため、支援者らの理念理解や教室活動に向かう姿勢にゆれや迷いが生じると、それはそのまま教室活動に反映されることになったからである。

筆者らにとっての「総合3-6」の一期目は、参与観察という課題の下に、学習者の思考と表現活動に関わった。実習生である筆者らはグループ・リーダーである実習経験者の下にあり、「総合」の理念を自分なりに消化し活動に向かう余裕が持てたと思われる。2004年春学期以降は、同センターのカリキュラム編成の変更から配当時数が半減するのに伴い、活動の運営方法はより流動的な対応が求められるようになった。そして、2004年度秋学期におけるTAをおかず実習生による活動運営においては、実習生は活動運びに手一杯になり、「総合3-6」というひとつのコミュニティーとして、活動が機能しづらい状態が続いたように感じられた。その原因は教室活動における設計、組織化、運営のうちの「組織化」ではないかと思われたが、このような中で筆者らはどのようなスタンスで関わればよいのか、サポーター同士の合意を図る機会を伺いながら模索しているうちに、結果として中途半端な関わり方で活動を終える結果になった。

1.2. TA としてかかわるにあたって

今期、筆者らは「総合3-6」にTAとして支援活動に携わることになり、改めてこれまでの活動を振り返り、問題意識の整理を行った。「総合3-6」（実践研究(9)）の活動参加者は、日本語学習者である学生と実習生の他に、実習をすでに終了した支援経験者が共に活動を展開する。実習生は、自らも「学習者」でありながら、クラス運営の主役となることを求められる。しかし、「総合」の活動には初めてかかわる彼らは、活動へのイメージ、

運営手順や要領への経験的な蓄積がない状態で活動に臨まなければならないことへの不安定さがある。一方、ある意図を持って自主的に参加しているリピーターとしての実習経験者は、予め活動展開への具体的なイメージや個別の経験的ノウハウやアイデアを持って臨むことができる。しかし、「総合」は流動的な活動展開が特徴であり、既存の前提や先入観を持たずに活動することが経験に勝るともいえる。そこで、この両者の力を融合し、相互に共振する支援がより可能性を高めるにはどうしたらよいのだろうか。

こうした現状への問題意識と反省から、筆者らは理念の共有を基盤とする「組織化」を行う必要性を認識した。実習生の主体性と、リピーターによる経験から得たアイデアの試行を活性化するには、サポーター間のネットワーク形成によるコミュニケーション環境が欠かせない。筆者らは、支援の組織化を、必要な情報が目に見える形で伝達されるしぐみを伴うネットワーク形成によってコミュニケーション環境を整えることとした。そして、筆者らを「調整者としてのTA」と位置づけた。つまり、いわゆる「ティーチング・アシスタント」としてのTAではなく、活動参加者(学習者、実習生)の自律性・能動性を活性化させるための調整者としての位置づけである。そして実践の主軸となる実習生が自ら築く教室コミュニティをいかに機能させていくか、という環境設定にその役割の重点を置いたのである。

2 支援の組織化を図る

「総合3-6」では、活動の活性化に伴う教室のコミュニティ形成が重要な意味を持っており、実習生はそのコミュニティ形成を支えるサポーターとして必須の存在となっている。設計者の細川の実践理論の具体化を目指す「総合」では、その理念を共有した上でサポーターの役割への理解

と合意形成はかり、一枚岩となって活動に臨む関係性の形成が求められると考え、支援の組織化を目指すことにした。

支援の組織化には、理念の共有が不可欠であることは、筆者らの当初の問題意識である。それでは、「総合」の理念を共有するとはそもそものようなことなのだろうか。筆者らは、「総合3-6」での活動を成功させたいという意図を持った参加主体がつながるための、共通のことばを持つことだと考える。「総合」の活動の理念は、設計者である細川（2004, 2003, 2002）が明確に示している。そこで、筆者らは「よいレポート」の価値基準となる「評価の三本柱」（細川, 2002）としての「(1) オリジナリティ, (2) 他者の受容, (3) 論理的整合性」を理解し合意形成を図ることで理念を具体的に共有する実践を目指したいと考えた。理念の共有は、サポーター同士をつなげネットワークの基盤を成す。これに個々の情報を伝える伝達の仕組みを目に見える形で整備することで、機能するネットワークが実現できると考えた。

「総合」では、支援に関わろうとするものが個々の不安や戸惑いを抱えたまま活動に望むようなコミュニケーション不全の解決を図り、不安やとまどいを含めた情報を共有した上で、個々の考えや発想を交換し、問い合えるコミュニケーション環境が必要である。そこで、筆者らはサポーターが自律性と能動性を持った支援組織となることを目標に、実践の目指す方向性と当該活動の位置づけの明確化を図る調整者として支援の組織化を試みた。そこで、筆者らは、まず支援活動の柱を支える媒体を設定することで情報の共有化を図り、支援の組織化を進めた。筆者らの考える支援の組織化とは、活動を進めるにあたり支援集団のネットワークを形成し、そのネットワークを繋ぐ媒体として、必要な情報を目に見える流れで伝達されるしくみをつくることであると考えた。

次章においてそのしくみについて詳しく述べたい。

3 実践：支援のしくみの整備と調整

3.1. しくみを提示する——理念の共有化のための3本柱

05春の計画にあたり、コーディネーターの細川からは、「(1) 学習者の活動はレベル別グループにしない。(2) 活動はグループを固定しない。(3) 実習生は毎時「活動案」を作成して実習に臨み、活動案は事前に実習クラスで検討する。」という3つの条件が示された。一方、筆者らはこれまでの経験から、実習生が一丸となって運営する「総合」の実践は、互いの理念と枠組みへの「共有感」を言語化し、確認を取りながら進めることの難しさと重さにあると感じていた。個人が抱く前提が、特定の学習者の個人的な悩みの請負いや「私のグループ」に目を囚われた「囲い込み」的な行動を起こさせたり、レポートの枠組みに依存した形式的なやり取りに陥らせないためには、サポーター間のコミュニケーションの質が問われる。

そこで、理念の共有のプロセスをことば化するしくみとして、支援活動を支える

(1) 計画：みちしるべ→(2) 実行：活動案→(3) 振り返り：「報告書」というサイクルで運営するしくみを設定した。このサイクルは、コミュニケーションの媒体となる共有フォーマットと併せられており、相互行為を通して理念形成と立場固めを深めつつ計画に臨めるように意図した。特に工夫をした点は、活動案作成の助走となる「みちしるべ」制作を考案したことである。

「みちしるべ」は、レポート執筆にあたる学生の視点づくりを支援することを目標にしサポーターから学生へのビジュアル・メッセージとして位置づけ、毎時活動終了後に併設の別科生BBSに公開し、「学習者」がその日のクラスで考えたことや現在取り組む課題の目的と意味の内化支援を図るものとした。しかし、筆者らは、「みちしるべ」の制作が、むしろ支援側の理念と立場形成の意識化に働きかけ、支援集団の自律性を高めると予

測し、「活動案」作成の視点を安定させ、活動状況の的確な把握、作品の読みの視点作りから評価の視点を作る基盤形成を期待した。活動案担当者は実習の2週間前から「みちしるべ」制作を開始し、実習当日に向けて活動全体の見通しを持たせ働きかけの軸を定めることができる。また、理念や目的は独特な用語でなく誰にでも（別科生を主役に）伝わることばで共有することも目的の一つである。そして、実習生と実習経験者のペアワークでこれにあたることで、サポーター間の信頼関係の構築とのネットワーク内の情報共有の促進を図ることにした。

以上のようにルーティン化した(1) みちしるべ (2) 活動案 (3) 報告書は、実践プロセスを記録するものとしてファイルしていくことにより、本実践の支援活動がポートフォリオに蓄積されていき、第三者的にも共有財として共有することが可能になったことは評価できると考える。

以下に示す二つの図は、支援の組織化における三本の柱をめぐる連環関係(図1)と、クラス活動を枠組みの視点から捉えそのフローを示したものの(図2)である。

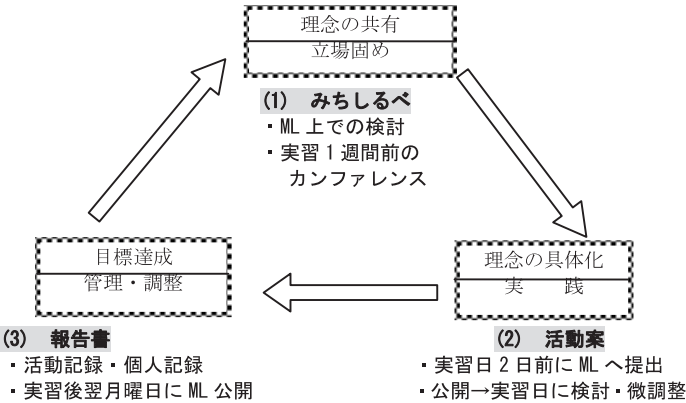


図1 支援の組織化の三本柱の連環図

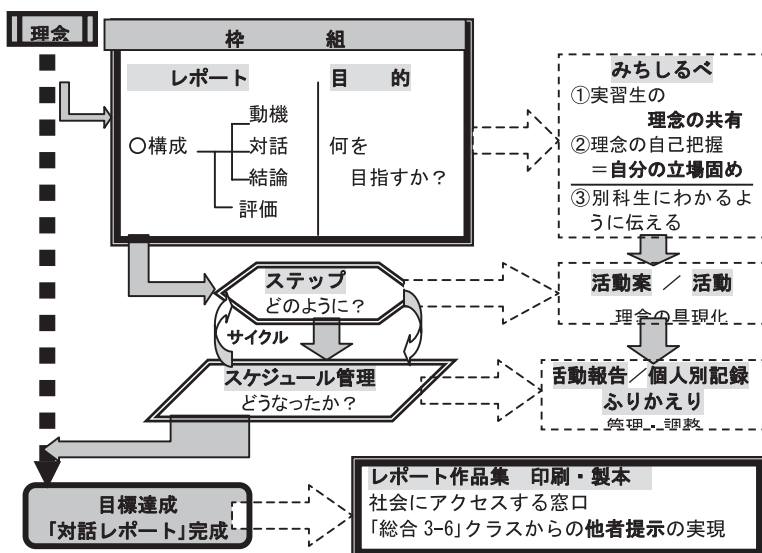


図2 「総合3-6」クラス活動組織化フローチャート

次章において上記三本柱を軸として行った実際の活動結果について述べる。

3.2. 実践結果

■クラス活動概要

はじめに、2005年度春学期「総合3-6」クラスの構成を示す。

コーディネーター：細川

学習者8名（早稲田大学日本語教育センター別科日本語専修過程履修者）

実習生6名（2005年春学期「実践研究（9）」履修者・支援担当）

実習経験者1名（2004年春学期「実践研究（9）」修了者・支援担当）

TA2名（2003年秋学期「実践研究（9）」修了者）

クラス活動は、学習者それぞれの書いた文章について、学習者が言いたいことをどのように伝えているか、あるいは、それが伝わったかどうかについての質問や確認を中心としたインターアクションを行った。

■支援組織化の結果

3.1で述べたしくみを具体的に運営の流れとして、実践についてここでまとめる。

(1) 事前準備～実践前半(6週目～)

まず事前の準備として、筆者らの実践の目標を支援の組織化とし、しくみの整備を行い、実践に臨んだ。実践に臨むに当たり、運営のしくみは、ゴールデンウィークに入る前まで3週にわたる実践クラスでガイダンスと内容説明及び調整を図り、2回の実習において、実践的なイメージが把握されるような働きかけを想定して望んだ。ゴールデンウィークによって活動の導入直後に10日ほどのブランクが入ることは、活動の運営としては、始めの難関であると思われたからである。しかし、実際には、始めの6週(実質的には2ヶ月)に支援者の人員の問題を含めた変動が大きくあり、活動が不安定なものとなった。〔表2参照〕そこで、ゴールデンウィークをはさんだ2～4週目には支援のペアワーク制を個人担当制に変更する調整を含め、運営のしくみの見直しを図る必要が出た。そのため、6週目までは実習生が新しいしくみの運営のリズムをつかむことに精一杯となった。そのため、筆者らは、TAとして、「総合3-6」の活動において、やり取りを活性化させる介入や、学習者BBSへの働きかけなど、「総合」の活動本来の内容の活性化と進行への目配りが欠かせない状態となったのである。この時点では、支援グループが自律的に機能するネットワークとしての特徴は見られなかった。

こうした状況は、実習生自体にフラストレーションを起こし、徐々にしくみに対する問題意識を具体的に発言として表すようになる。それは、6週目に行ったテーマ発表会の準備をめぐり、自律性に期待しようとした筆者らの対応と、実習生が不安を抱き「TA」に期待する気持ちとの齟齬が実際の活動に軋轢が生じさせたことがきっかけである。ここで、実習生はしくみの複雑さや度重なる変更への異議を発信し、それによって、筆者らも自分たちの理念と意図を伝えられないままに実習生に負担を負わせていたことを改めて確認することができた。これ以降、活動のしくみが機能し始めていった。しかし、9週目までは、まだTAは実習生の運営の調整とクラスの活性化の調整の両方を視野に入れていく必要があった。

【表1】「総合3-6」参加者概要

早稲田大学日本語教育センター別 科日本語専修過程履修者				備考	早稲田大学日本語教育センター別科 日本語専修過程履修者				備考
	性別	早稲田レベル	グループ			性別	早稲田レベル	グループ	
A	男	3	A		E	男	3	B	
B	男	4	A		F	女	6	B	
C	女	5	A		G	男	6	B	
D	女	8	A		H	男	3	B	途中参加者
※サポーター5名					※サポーター5名				

(2) 実践後半 (7週目～)

7週目を過ぎたところから、事前、当日、共にTAとしてあまり活動への介入をする必要がなくなっていく。筆者らの調整事項は、実質的なスケジュールと実務的な内容の調整で終わり、「総合」への活動参加者として、本質的な内容や理念の共有を目指した合意形成への対話を深める時間が充実していった。スケジュールや、活動の目的や方向性、そして、評価についての検討は、常にサポーター内で合議で意思決定がされるようになった。

〔表1〕は「総合3-6」クラスに参加した別科生のリストである。当初グループの固定性は取らない方針で始めたが、作品の読み込みを核に内容をめぐる議論をより深めていくために、8週目より、A、B二つのグループに

分け各担当支援者も固定とした。グループ分けは、実習生が別科生のレポートのテーマと進み具合などを考慮してグループ分けを決定し、支援側は個々の関心によって自発的に参加グループを決めた。なお、各週の具体的な実践記録の要点を、〔表2〕として付録に示した。

4 結果

4.1. 支援体制の組織化の試みとその結果——コミュニケーション土壌の形成不足

前章において述べたように、筆者らは理念の共有化のために、互いに連環した必然性のあるものとして「みちしるべ」「活動報告書」「活動案」を三本柱として設定した。この三本柱をめぐり支援者間のやりとりが成されることで、理念の共有化が図られるであろうことを意図していた。また教室におけるコミュニケーション土壌の形成はまず支援者から、という考えもあった。しかし実際この3本柱が機能し出すまでには、活動の半分程度の期間を有してしまう結果となってしまった。その原因としてまず、支援体制を支えるための3つのツールの意義の伝達が困難を要したことである。これは、はじめての経験に不安を抱く実習生にとっては、仕組みの枠組みをなぞることだけでも容易でなかったためである。結果として、活動当初の実習生の反応には複雑な仕組みを持ったものとして抵抗感が見られた。そして与えられた仕組みを「回すこと」に実習生の労力が注がれ、肝心の別科生との教室活動に目を向けにくくなっていた。筆者らはある程度の混乱は想定のものとし、徐々に慣れることで問題は解決されるであろうと構えていたものの、思うように組織化は進まずにいた。そのおおきな要因としては「コミュニケーション土壌の形成不足」が考えられると筆者らは捉える。例えば今回の活動前半の活動の停滞(p.8)は、筆者らと実習生

とのコミュニケーションの土壌が十分に養われないまま、学習者の活動の把握と対応へ連携が取れなかったことに起因した例と捉えることができよう。

実際、活動自体に慣れとともに、ML や実践クラス疑問や違和感をことばにして交わすことのできるコミュニケーションの土壌が形成されてくると、徐々にコミュニティとして機能するとともに、先の三本柱の意義も意識されていったことが伺えたのである。それは活動当初、別科生に「総合の理念を教える」ことに終始する言動が多くみられたのだが、次第に「自分たちの理念共有にとって必要なもの」が認識され、そのためのツールとして3本柱が意識されてきた発言がいくつかみられたことから伺える。活動の最終段階には支援組織がコミュニティとして機能を始めたとしているが、筆者らの支援体制の組織化の試みは、その意義や目的の意識化の合意が十分に図りきれなかった。

以上の反省を踏まえ解決策を述べるのなら、以下のものが考えられる。

(1) 実践前の実習生向けガイダンス実施

この「コミュニティの土壌を形成する」ための解決策としては、活動が走り出す前に時間を設け、「実習生」に対しての活動への関わり方のガイダンスを兼ねた話し合いを行い、支援者としてのこの時点で活動に携わる上での基盤を培うことが考えられる。これは同じものを目指して行うべきだというのではなく、理念の共有化を図った上で互いの立場や意見を交わすための土壌作りの一環としての位置付けである。

(2) サポーター（実習経験者の配置）

「総合」において実習生は、実習クラスに関わりながらその理念と自分の言語教育観を手探りで見つけ出すことが期待されている。従って実習経験者であるサポーター相互の別科生への働きかけに対するフォローも必要であり、実習経験のあるサポーターにはこの役割が期待できる。しかし

今回は諸事情により第4週目から実習経験者を配置できなくなったことも、別科生への働きかけ等をめぐり混乱をきたした要因のひとつと考える。

また、今回の実践では、別科生側の参加者が活動の中盤まで流動的で、毎時欠席者がある状況で活動を進めなければならなかったことが、サポーターに個々への対応と全体的な活動の導きへのとまどいを大きくしていた。

そもそも「総合」の活動は全体が足並みをそろえた活動展開を図ることは難しい。むしろ参加主体個々の状況を尊重した活動展開が醍醐味であるのだが、とりわけ今回の実践は進度のばらつきの幅が大きく、個別の活動状況を尊重しながら全体との調整を図る支援の難易度が高まった。このような不規則な事態は実践活動において当然のことといえる。重要なことは、何か問題が起きた時に、互いに話し合えるコミュニケーションの土壌や基盤を持っていることだと考える。今回の活動においては、TAも発生する事柄への対応に追われ、その働きかけの意図を実習生に十分に伝えることができないまま、活動を進めることに追われた感が残る。

「総合」は学習者が主体的に発信することによって成り立つクラスである。特に、言語運用レベル混成クラスでは、安心して発信できる風土の形成も重要になる。個々の学習者は発信することに対する考え方をそれぞれもっているが、活動が進むにつれて自然に言いたいことが言える土壌ができていった。サポーターからの「アドバイス」を待つ姿勢が、次第にクラスメートのことばに耳を傾け考えるやり取りに変化し、その結果が産出物にも見られるようになるという形で相互行為が活性化する様子が観察された。

4.2. まとめ——「協働」の問い返しを通して

筆者らは計画立案の方針として「実習」を「実践研究(9)」クラスというコミュニティの「仕事」と捉えることから出発した。「総合」の実践は無調整の状態では自然発生的には成立しない。それは理念、枠組みの設計に

基づき、意識的に働きかける「教育実践」行為であり、実践に関わる一人一人が提示された理念と方法論をどう理解し、どのように教室活動に体现していくかの「イメージ」の表現化が求められる。イメージを具体的にことばにのせる努力は、サポーターにとっても重要であり、お互いの「共有感」が実は主観的前提に基づくものであることがやり取りによって確認される場面が見られた。本実践では、時間を要したが、意識的に記述し、発言するやりとりを丁寧に行うことで目的を共有する合意形成が進み、支援の協働が活性化していったと言える。

そこで、今一度組織化を振り返ってみたい。筆者らにとっての支援の組織化は、支援団体のネットワークを形成に主眼をおき、筆者らの経験からそのために必要な媒体と仕組みの提示を試みた。しかし、その仕組みは構造として捉えられてしまったことで、設定の意図そのものを伝えることができなかった。活動の展開に従い、仕組みは実習生に経験的に受け入れられ、その意図が発見されるに至ったが、それにいたるまでにかかった時間と、精神的な軋轢を考えると、同じだけ時間をかけることを想定すれば、始めから話し合いに時間を費やしたほうが良かったとも考えられる。なぜなら、ひとつのコミュニティーにおいて何かひとつのことを成し遂げていこうとするには「合意」を求めながら進めることが不可欠であるからだ。この「合意」を積み重ねていくには、一方からの押し付けではなく、ともにがんばって良いものを試行錯誤しながら見つけ、作り上げていこうとすることからはじめることによって、本質的なコミュニケーションの基盤を育むことができるだろう。このプロセスを経ることで支援に対しての自覚が促されることになり、支援組織が自律性と能動性を獲得が期待できる。参加する主体が考え、コミュニケーションを図りながら合意形成に基づき目的に向けて行動すること、これを協働的行為と捉える。すなわち、支援の組織化とは合意形成されながら作られていく「協働」の実現を目指すものであったと考える。

総合活動型日本語教育が育成を図るコミュニケーション活動能力とは、一人ひとりがコミュニティ形成に能動的参加する能力と捉えることができる。その意味で、「総合3-6」の永続的な目標は「良いレポート」を探求する活動を通して「教室コミュニティ」が形成されていくことと言い換えることが可能である。しかし、「教室コミュニティ」の形成は「組織化」によって実現を目指すものだろうか。この問いは、今回の実践を通し、新たに筆者らが得た問いである。「支援の組織化」では、ネットワークとコミュニケーションの仕組みをもつことにより規則性のある協働体制をとるコミュニティができていった。しかし、「総合3-6」が目指す「教室コミュニティ」とは、ここで展開した言語活動をめぐる相互行為そのものが築き上げる関係性であり、そこには「学習者」も「支援者」もなく、ただ一人ひとりの参加者がそこで互いに発信し、受け止め、考えることを繰り返すことが生み出した無形の所産といえる。教室コミュニティの形成を尊重する実践では、「学習者同士の協働」を安易に期待し評価的発言を繰り返すことを見直してみる必要があるだろう。学習者同士のやり取り＝協働とするのではなく、一人ひとりの目標達成を目指すプロセスにかかわりながら、本質的に互いが尊重しあうことのできる価値観を見出すような相互行為の活性化の基盤づくりから出発することではないかと、今回の実践では改めて考えさせられたのである。

5 おわりに

2005年度春学期の実践を追え、今一度その実践を振り返ってみた今、筆者らは再び「組織化」について問い直しを始めている。それは、組織化とは形骸化をたどる形に求められるものではなく、組織構成員が、明確で客観的な目的とそれを達成しようとする動機を共有し、実践に望む関係性

を作ることと捉えるべきではないか、ということである。それにはまず、例えば「良いレポートを書きましょう」という目標設定が前提となるのではなく、「良いレポートとは何か」といったある種自明の内容について取り直し、議論できるような土壌を形成していくことから始まるのではないかと考えるのである。本実践を通し学んだことを生かしながら、次なる実践に向かいたいと考える。

また本実践にあたり、「教室コミュニティー」メンバであった実践研究(9)の実習生の皆様^{注1}、「総合3-6」メンバの別科生の皆様に心より感謝を申し上げます。

注

- 1 実践研究(9)のメンバの皆さん(敬称略):大西博子,小田晶子,栃木英子,宮口さや子,山本怜,藪本容子,山田裕子

文献

細川英雄(2002).『日本語教育は何を目指すか——言語文化活動の理論と実践』明石書房.

細川英雄(2003).問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育 早稲田大学日本語研究教育センター「総合」研究会(編)『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語研究教育センター.

細川英雄+NPO法人「言語文化教育研究所」スタッフ(2004).『考えるための日本語——問題を発見・解決する総合活動型日本語教育のすすめ』明石書房.

【表2】 2005年度春学期「総合3-6」実践記録

開講前の準備				
<input type="checkbox"/> 「総合3-6」クラス(以下、クラス)運営の理念の確認と仕組みづくり →活動スケジュール作成、みちしるべ+活動案+記録・報告書のリンク、人員配置(実習経験者+実習生のペア) <input type="checkbox"/> 実習クラス用スケジュール表・ファシリテーター担当表の作成、活動報告書・承諾書フォーマット作成 <input type="checkbox"/> 第2週目の活動案、みちしるべVol.1, 2の作成				
週次	日	「総合3-6」クラス ◇みちしるべ	支援者(実習生・TA)の動き： 上段：教室活動 下段：教室外	今週のTAの動き： □事前 ■当日 ▲その他 配布物：★実習生用 ☆活動用
①	4月13日	ガイダンス 90分を前半と後半に分け、同じ内容を2回実施する。 ※VCD利用 ◇Vol.1「総合3-6」によるこそ	・細川先生の説明のみ。 ・支援者は教室に円座を設け、ガイダンスに参加する別科生が親しみやすさを感じる雰囲気作りをする。 ・支援者の構成は以下のとおり。 実習生+実習経験者+TA	<input type="checkbox"/> ■ガイダンス準備と介添え <input checked="" type="checkbox"/> ■実践クラスで、支援活動の理念と運営の仕組みを説明。 ★実習クラス全体スケジュール・ファシリテーター担当表 ★☆みちしるべvol.1 (シラバスダイヤ) ▲ML(実習生、別科生+)の作成管理 ▲別科生名簿作成・管理
②	4月20日	「総合3-6」では何をするの？ ①全体活動 ・授業の進め方 ・レポート構成の説明 ・自己紹介 ②グループ活動 ・活動へのイメージ作りと別科生同士の交流 ・オンデマンド利用のガイダンス(マルチメディア教室へ移動) ◇Vol.2ふたつの「D」 -おいしいハンバーガー構造	・TAが作成した活動案に沿った活動。※細川先生による導入活動のポイント ・マルチメディア教室では、個別対応でオンデマンド講義コンテンツの利用の仕方のガイダンスをする。 ・同意書の説明と取得 ・グループ別活動報告書作成 統一フォーマット、MLへ ・みちしるべ、翌週分活動案の作成・検討 ※以下、報告書・みちしるべ・活動案をR.W.(ルーティンワーク)とする。 ・オンデマンド講義の受講 ・別科生BBSへの書き込み ・実習経験者は参加趣意をMLに公開する。(サポーター同士の目的意識の共有)	<input type="checkbox"/> マルチメディア教室の予約手配は細川先生に依頼。 <input checked="" type="checkbox"/> ■実践クラスの進行 <input checked="" type="checkbox"/> ■クラスの進行 ☆同意書 ▲別科生BBSへの書き込み、MLを利用しBBSコミュニケーション参加への働きかけ。 ▲別科生へのオンデマンド受講促進。 ▲実習後、実習生MLへのコミュニケーションの働きかけ。 ※共有情報フォーマットの定着とルーティン化を図るため。 ▲ML-記録と報告書取りまとめ要領提示。活動実態と、個々の別科生に向き合う視点の重視。 ▲実習経験者と実習生の関係作り。
③	4月27日	テーマと構想 ①全体活動 「動機」とは何か	・クラス運営：3名ペア ・活動案担当者は、事前に作成し、ML及び実習クラスで検討 ・活動報告書の作成	<input type="checkbox"/> 実習生ML-活動案等、共有物提出確認とサイクル定着の働きかけ。 <input checked="" type="checkbox"/> ■実践クラスの進行。 <input checked="" type="checkbox"/> ■クラスに実習生として活動参加。

		<p>②グループ活動</p> <p>テーマと構想についての意見交換</p> <p>③全体集約</p> <p>グループで話し合ったことを簡単に発表し、シェアする</p> <p>◇Vol.3動機ってなに？</p>	<p>記録と報告は分担し報告者が取りまとめをする。</p> <p>・R.W.</p> <p>・別科生BBSへの書き込み。</p> <p>・クラスづくり。</p> <p>・別科生BBSへの参加及び促進。</p> <p>※書き込みとオンデマンド講義受講の声がけ。</p>	<p>▲支援活動の仕組みの調整。</p> <p>授業後、実習生のペアワーク制を個人担当に変更。急な変更に伴い、次週担当はTAが代行する。</p> <p>※実習経験者が他クラスの教室ボランティアとして異動し、ペアリングが不可能になったため。</p> <p>▲みVol.4、及び翌週分活動案作成。</p> <p>▲ゴールデンウィーク中の別科生への支援活動の活性化を働きかける。</p>
④	5月11日	<p>動機文検討「仮説」の意識化</p> <p>①全体活動</p> <p>「私にとって●●」について考える</p> <p>②グループ活動</p> <p>◎動機文提出状況に個人差が現れる。</p> <p>◇Vol.4動機をみつめるーオリジナリティの話</p>	<p>・実践クラス進行(TAより移行)</p> <p>・「総合」のレポートの核となる動機と仮説の関係の意識化を図る支援。</p> <p>・テーマの絞り込みを目指したグループ対話を活性化する。</p> <p>・R.W.</p> <p>・別科生BBSへの書き込み。</p> <p>・2週目、3週目に出席しなかった人へのフォロー</p> <p>・BBSへのレポート提出への働きかけ。</p>	<p>□クラス運営のスケジュール再検討</p> <p>★新しい担当表</p> <p>■クラス運営</p> <p>■教室活動における対話の活性化を図る。</p> <p>■活動スケジュール調整</p> <p>※次週予定のテーマ発表会を6週目に延期</p> <p>▲個別進行状況に差異が表れ始めた現状を否定的に見ず、個々の発信の内容に向き合うことと、支援者間の情報共有の重要性の強調に努める。</p> <p>▲仕組み変更に伴うフォロー。主体的な声かけによる支援活動を求め、報告書とMLの活用を働きかける。</p>
⑤	5月18日	<p>動機文検討、テーマ発表会準備</p> <p>読み合いの視点の意識化として相互自己評価のポイントの働きかけ</p> <p>①全体活動</p> <p>コンテンツの理解促進と本クラスのルールを確認</p> <p>②グループ活動</p> <p>◎動機文は1名以外提出</p> <p>◇Vol.5対話にむけてーキャッチボール</p>	<p>・実践クラス進行</p> <p>・クラス運営</p> <p>・教室活動のコンテンツと、本クラス内のルールの理解促進</p> <p>・動機文検討。クラス内やりとり活性化の促進。</p> <p>・R.W.</p> <p>・別科生BBSへ書き込み。発言とやり取り活性化の働きかけ。</p> <p>※実習生書き込みの集中を避け、ファシリテーター中心を緩く申し合わせる。</p> <p>・BBS、対面等、別科生の求めや必要に応じて個別にも対応。</p>	<p>□テーマ発表シートの作成</p> <p>□クラスでの検討用原稿のバックアップ準備。</p> <p>■活動参加者として、内容にかかわる発言を発信していく。</p> <p>■欠席が続いている登録者の現状把握。(出席者に確認など)</p> <p>▲「別科生が受身」が問題になり、「別科生同士の働きかけを起こしたい」ということが問題にされる。</p> <p>▲TA作品をどう読みとっていくかを問う発信に努める。</p> <p>▲TAはMLを中心に利用。BBSコミュニケーションは実習生中心に。</p>

⑥	5月25日	<p>テーマ発表会 全体共有の場</p> <p>「自分の問題として捉えているか」</p> <p>①全体活動</p> <p>テーマ発表とレポート朗読</p> <p>②グループ活動</p> <p>発表と動機文の内容検討。</p> <p>◎他クラスからの異動希望者の見学1名</p> <p>◇Vol.6対話の報告ー対話の相手と何を話しましたか？</p>	<p>・実践クラス進行</p> <p>・クラス運営</p> <p>・進行状況の差に応じ一人一人に方向性を示す。</p> <p>(報告書の所感より：実践クラスで方向性を定めたものの、達成できず。)</p> <p>・R. W.</p> <p>・別科生BBS</p> <p>・個別にも対応</p> <p>・BBSへのグループ活動記録の掲載を開始。</p>	<p>□テーマ発表会準備の調整と、つめ</p> <p>■活動参加者として活動。</p> <p>▲個々の進行状況の差が実習生の戸惑いと焦りを生む。TAは意識的にレポートへの内容的な発言に努め、対応の個人化を実践し焦りの軽減を図る。</p> <p>▲作品の読みを実習生で刷り合わせをしたいとの要望が強まるが、実習クラス90分内には配当できず。</p> <p>▲発表会準備は担当者の運営を尊重した上での調整を試みたが、互いの期待に齟齬が起きる。</p>
⑦	6月1日	<p>対話準備</p> <p>レポートの目的・構成・対話に向けてのポイントを押さえる</p> <p>全体活動</p> <p>※後半のやや膠着した場面で、細川先生がほぐしに介入</p> <p>▲出席者のテーマをめぐり「人間」という大きなテーマの可能性に触れられる。</p> <p>◎出席者4名のみ。別科生にやや疲れが見られる。</p> <p>◇Vol.7「対話」報告からの発展ー対話をまとめるー</p>	<p>・実践クラス進行。運営の仕組みに対する発言が活性化。</p> <p>・活動運営に伴う進行、記録、対話の活性化という役回りの多様性に、「やることが多すぎる」ことが問題となる。</p> <p>・「みちしるべ」の位置づけと意義の問い直しが起こる。</p> <p>・クラス運営</p> <p>・レポートの目的と目指すものの共有を図る。</p> <p>・R. W.</p> <p>・別科生BBS</p> <p>欠席者への呼びかけ。</p> <p>・BBSへのグループ活動記録</p> <p>▲「みちしるべ」検討のやり取りが活性化する。</p>	<p>■活動参加者として活動。</p> <p>▲活動運営は、ほとんどTAの調整の必要がなくなってくる。</p> <p>▲運営の仕組みに対する疑問と不満への調整。</p> <p>TAが設定し、提示した仕組みに流れる理念が伝わらず意識化されていなかったことが明らかになる。</p> <p>▲「みちしるべ」と活動案作成の連動関係を今一度確認し、理解を図る。</p> <p>▲毎回延長となり、次に教室を使用するクラスに迷惑をかけていることが問題となり、教室変更を検討。</p>
⑧	6月8日	<p>互いの進捗報告。</p> <p>今後のスケジュールの確認と、各自進捗への自覚を促す。</p> <p>①全体活動</p> <p>進捗度把握</p> <p>スケジュール確認</p> <p>②グループ活動</p> <p>内容検討。</p>	<p>・実践クラス進行</p> <p>▲固定グループによる活動の提案。2グループを決定。</p> <p>・クラス運営</p> <p>・全体スケジュールを視野に入れた活動の意識化を促す。</p> <p>・内容が充実してきたレポートの互いの読みを深め、クラス内対話の活性化を図る。</p> <p>・対話の具体化とペアリングの補助。</p>	<p>□教室変更（細川先生）と、MLでの事前案内。</p> <p>■活動参加者として活動。</p> <p>■教室変更フォロー</p> <p>▲対話を始めた人がいる一方、まだ動機が固まらない人もいる状況に支援側には強い戸惑いと焦りが見られる。</p> <p>▲【全体会→グループ活動】というクラス進行がやや形骸化し、別科生の遅刻が目立つようになる。</p> <p>▲本日より教室移動をしたため、やや混乱。</p>

		<p>対話の構想を視野に入れる。</p> <p>対話の計画の確認</p> <p>◎移動者1名受け入れ</p> <p>◎本日より教室変更</p> <p>◇Vol. 8アクティブ・エバリュエーションⅠーアクティブ・リーディング</p>	<p>・R. W.</p> <p>・別科生BBS</p> <p>■一部の別科生には自発的なBBS利用もみられる状況。</p> <p>・BBSへのグループ活動記録</p>	
⑨	6月15日	<p>対話のまとめ方</p> <p>グループ活動を主として、原稿の内容をめぐるクラス対話を深め、各自の執筆活動の充実を図る。</p> <p>相手のことばに耳を傾けることの意識化を図る。</p> <p>①全体活動</p> <p>②グループ活動</p> <p>◎新参加者への個別対応</p> <p>◇Vol. 9アクティブ・エバリュエーションⅡーアクティブ・リスナー</p>	<p>・実践クラス進行</p> <p>・報告書の見直し。</p> <p>報告書の「記録」の信憑性について議論が紛糾。</p> <p>・クラス運営</p> <p>・読む・コメントを言う、についての視点の意識化。(評価の3つの柱)</p> <p>・新参加者へのガイダンス</p> <p>・R. W.</p> <p>・別科生BBS ※活性化せず</p> <p>・BBSへのグループ活動記録</p> <p>※文宇起こし報告が定着</p>	<p>□MLのやり取りの調整。</p> <p>■活動参加者として活動。</p> <p>■報告書のあり方をめぐる問い直しをめぐる調整。</p> <p>▲オンデマンド講義は定着したが、BBSはほとんど機能していない。別科生から(実習生からの働きかけの)メールが多すぎるとの不満の声がある。</p>
⑩	6月22日	<p>相互自己評価について。</p> <p>評価の3つの視点の意識化</p> <p>下書きの構成を視野に入れる。</p> <p>①全体活動</p> <p>②グループ活動</p> <p>◎相互自己評価に対し、別科生から強い異論が出る。</p> <p>◇Vol. 10 アクティブ・ライティング</p>	<p>・実践クラス進行</p> <p>・別科生同士の「協働」が起きているか否かが話題に上る。</p> <p>・クラス運営</p> <p>・スケジュールを追う焦りから、レポート構成手順を追うような働きかけも目立つようになる。</p> <p>・R. W.</p> <p>・別科生BBS</p> <p>・BBSへのグループ活動記録</p> <p>・相互自己評価に対する異論について報告が出される。</p>	<p>■活動参加者として活動。</p> <p>▲Aグループにくらべ、Bグループはやや活動に膠着が見られる。</p> <p>▲2つのグループの活動状況を見てグループ再編を提案したが、検討の結果、現状のまま続行となる。</p> <p>理由)A…やり取りがおき始めているため、前回は踏まえて深めたい。</p> <p>B…もう一度活動してみたい。</p>
⑪	6月29日	<p>出席者が少なかったため、出席者全員で、内容検討を行う。</p> <p>①全体活動は設けず、すぐにグループ活動へ。</p> <p>※Bグループ出席者が1名となったため、Aグループと合同とする。</p> <p>◎出席者4名(Bグループは、1名のみ)</p>	<p>・実践クラス進行</p> <p>・「評価」についての議論。</p> <p>・全体スケジュールの調整決定</p> <p>第一次原稿締め切りを1週間延期し、相互自己評価を1週のみとする。</p> <p>・クラス運営</p>	<p>□■「評価」の実践に関する全体調整</p> <p>★相互自己評価表</p> <p>■全体のスケジュールの確認と、日程の調整を提案。</p> <p>■活動参加者として活動。</p>

		<p>◎全体の進行状況が計画から2週間程度ずれる。 ◇Vol.11自分との対話－世界にたったひとつのわたしのレポート</p>	<p>評価についての全体見当は見送り。 ・R. W.</p> <p>・別科生BBS 欠席者への呼びかけ。 ・別科生MLで、スケジュールの確認。 ・BBSへのグループ活動記録 ・MLを利用した働きかけが主体的に行われるようになる。</p>	
	7月6日	<p>相互自己評価への合意を図全体討議。(90分) 下書きの最終検討の予定は、実施できず。 → 金～週末にかけて、オープンクラスを設置し、自主的に原稿検討の読み合いのできる場を設定。</p> <p>◇Vol.12アクティブ・エバリュエーションⅢ<他者の受容>の話</p>	<p>・実践クラス進行 「評価」について再議論。 実習生の立場作りと、クラスへの対応と実践方針</p> <p>・クラス運営</p> <p>・R. W.</p> <p>・別科生BBS ※励まし ・BBSへのグループ活動記録 ・オープンクラスの実施(自由)</p>	<p>■活動参加者として活動</p> <p>■授業後、MLで週末にかけてのオープンクラス設定のお知らせ。 ■スケジュール最終調整</p> <p>☆相互自己評価表 △相互自己評価についてクラスとして合意を図る上で、非常に内容のある討議を展開。 △評価について真剣に考えた90分は、最終原稿提出へのモチベーションを高めたようだ。</p>
⑬	7月13日	<p>評価用レポート配布</p> <p>相互自己評価会のガイダンス パーティー</p>	<p>・実践クラス進行</p> <p>・クラス運営</p> <p>・R. W.</p> <p>・別科生BBS</p>	<p>■日程調整と期末業務の提示と振り分け ☆相互自己評価表、優秀作品投票用紙</p> <p>△原稿締め切りに1名が遅延したが、最終的には全員のものが出揃った。</p>
⑭	7月20日	<p>全員参加相互自己評価会 評価表から得点制を除き、メタ評価のみで評価を実施。</p> <p>相互自己評価を反映させた原稿の締め切りは、後日設定。</p>	<p>・実践クラス進行 ・クラス運営</p> <p>・投票結果集計発表</p> <p>・R. W.</p> <p>・別科生BBS ・評価の取りまとめ集計</p>	<p>■日程最終確認 ■活動参加者として活動</p> <p>△クラス開始時間を早めに設定し、120分間で全員による相互自己評価会としたが、開始時間の周知徹底が甘く、結果的には時間が不足。</p>
	7月25日	<p>最終稿提出締め切り</p> <p>相互自己評価とりまとめ及び文集づくりは実習生</p>	<p>・相互自己評価の取りまとめ集計及び細川先生への報告 ・相互自己評価表配布。(メールボックスへ。) ・「ひとこと」執筆 ・文集製本発注業務</p>	<p>△相互自己評価会でもらったコメントに基づく再検討は任意。 △文集完成と配布は10月</p>

◇「総合 3-6」 レポート テーマ発表	名前：
<p>㊦ タイトル</p>	
<p>㊦ 仮説^{かせつ} （わたしにとって ○○は、 _____ である。）</p>	
<p>㊦ 対話^{たいわ}の 構想^{こうそう}¹ （どんなことを話^{はな}したいか。どんな人^{ひと}と話^{はな}したいか。など）</p>	
<p>㊦ 一言^{ひとこと}PR</p>	

¹ 構想^{こうそう}：これからすることの具体的な考^{くわいてき}え。「何^{なに}をするか。どのようにするか。内容^{ないよう}はどうするか。…」ということの考^{くわいてき}えをまとめたもの。構想^{こうそう}をもとにして計画^{けいかく}を立てる。

そうごじこひょうかひょう
相互自己評価表

2005 年 月 日

かきくめい そうごう
科目名：総合3－6

レポート題名 だいめい	執筆者名 しつぱっしやめい
----------------	------------------

評価のポイント ひょうか	評価コメント ひょうか
1. レポートのオリジナリティ (固有性) ★ テーマは自分の問題として捉えられているか。	
2. 議論の受容 ★ 他者との議論や意見は十分にとり入れられているか。	
3. 論理的一貫性 ★ 理由 (動機) から結論への流れに一貫性があるか。	
そうごう 総合コメント：	
	ひょうかしかしめい 評価者氏名

評価者氏名：

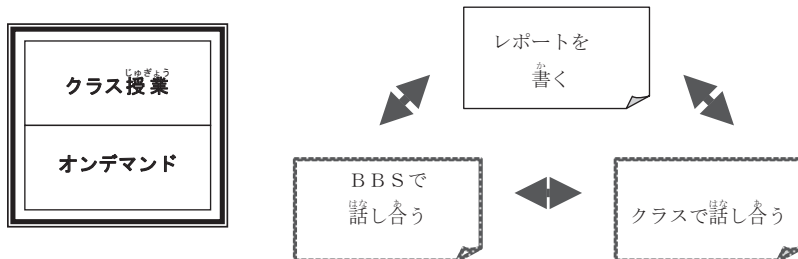
	オリジナリティー	他者の受容	論理の一貫性	総合評価
920420107オスモロフスカ クリスティーナ				
920420281イエンペリ ヨハネス				
920420399スコル オーエン				
920420522デレオ ダリオ				
920510034于 佳慧				
920510187小島 イザツキ 章				
920510247鄺 用俊				
920510341陳 薇				
920510355鄺 嵩韜				
●ベスト1に選んだ理由				

1. 「総合3-6」では何をするの？

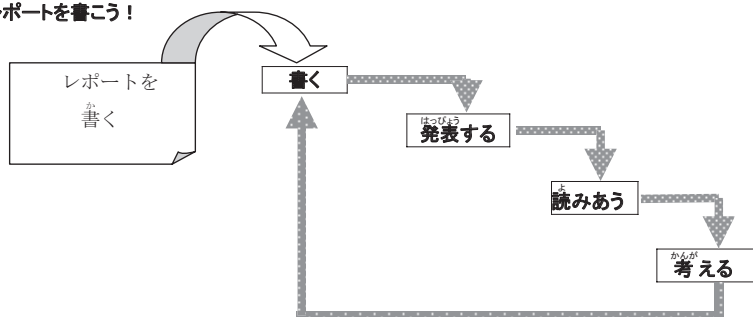
「総合3-6」では以下の手順にそって「レポート集」をつくります。

このクラスでは「教室活動」と「BBS での活動」が2つの大きな柱です。

クラスと BBS に参加していいレポートを書きます！！



2. レポートを書こう！



教室とBBS 両方で！

<STEP1> 動機 (Motivation) を書く

- ① 自分の興味・関心のあることについてテーマを選んで、タイトルをつける
ーたとえば「〇〇と私」
- ② テーマを選んだ動機を書く。(A4サイズ半分ぐらい: 400～1000 字)
◇なぜそのテーマを選んだのか ーレポートを読む人にわかりやすく説明する。
◇自分の考えを「仮説(hypothesis)」にしてみる。

「仮説(hypothesis)」: 「自分(私)にとって〇〇とは■ ■である」

※ 動機文の終わりに必ず「仮説(hypothesis)」を出しましょう。これは、後からレポートを書いていくためにとても大切です。

※ 次の STEP「対話」の相手をイメージしながら書いてみましょう

<STEP2> 対話(Dialogue)をして、対話内容をまとめる

- ① 自分のテーマの「仮説(hypothesis)」について、いっしょに話したい相手を決める。
(1名か2名)
 - ② 対話を申し込んで、相手とじっくり話し合う。
 - ③ 話し合った結果を教室で報告し、意見をもらう。
- ※授業のあとでBBSにもらった意見への自分の考えを書いてみましょう。

<STEP3> 結論(Conclusion)を書く

- ① <STEP2>「対話」でもらった意見を参考にして、自分の結論をまとめる。
※授業やBBSを通して、結論を考えてみましょう。
- ② レポート全体を完成させる。

3. レポートを読んで評価をしよう!

★他の人のレポートを評価できる力をつけよう!

○レポート完成後、それぞれのレポートについて相互自己評価(active evaluation)をする。

※ 自分のレポート、メンバーのレポートに成績をつけます。

【評価の3つのポイント】

- ★ 1: 自分の問題としてテーマを書いているか <オリジナリティー(固有性)>
- ★ 2: 他の人の意見をどのように取り入れたか <インターアクション(議論の受容)>
- ★ 3: 動機から結論までに一貫性はあるか <論理性>

※「一貫性があるレポート」とは?

動機で出した「仮説」について、対話し、ディスカッションし、考えて結論を出しているか。

◇上の3つのポイントをいつも考えながらレポートを書いたり読んだりすることが大切です。

◇評価は相互自己評価を行う。相互自己評価表をもとに、15点満点中12点獲得を80点の目安とします。

2. いっしょにレポートを作っていくメンバー

名前 と ニックネーム	れんらくさき 連絡先(mail)

3. どれだけ書くの？

レベル3の人:3枚 レベル4の人:4枚 } 1 ページは 400 字×400 字 1600 字
 レベル5の人:5枚 レベル6の人:6枚 } 最終ページは 3/4以上書くこと

4. 単位がでるための条件(以下すべてをクリアした人)

◇全体の 2/3以上出席した人

◇レポートを提出した人

◇レポートを完成させた人(規定の字数をクリアすること)

◇「相互自己評価」に参加し、きちんと自分と全員分の評価表を提出した人

5. オンデマンドBBS(掲示板)の入り方

<https://www.wnp.waseda.jp/portal/portal.php> にアクセス

Waseda-netportal→【メールアドレス・パスワード】

→オンデマンド授業→「総合 3-6(春)」→「参加」→「新規」(または意見への意見)

※週2回以上アクセスしましょう！(ちゃんと Check します！)

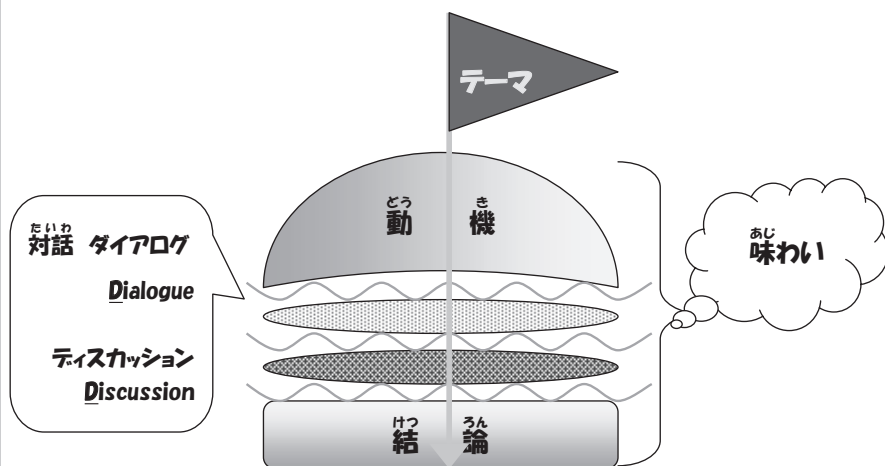
(スケジュール)

週次	日	教室活動	BBS 課題	ワンデマン ド 講義	備考:
①	04.13	ガイダンス	テーマ (仮説含む) 書込み	①	
②	04.20	「対話レポート」とは? 「テーマ」とレポートプラン	動機文①を出す	①	
③	04.27	動機文発表・読み合いⅠ	動機文②を出す	②	
④	05.11	動機文発表・読み合いⅡ	動機文③, テマを出す	②	5/16動機完了
⑤	05.18	テーマ発表 クラスメートと対話	対話相手を決めて 報告する	③	5/24対話完了
⑥	05.25	対話報告Ⅰ	対話の報告①を出す	③	5/30 対話メモ 完了
⑦	06.01	対話報告Ⅱ	対話の報告②を出す	④	
⑧	06.08	結論下書き発表・読み合いⅠ		④	
⑨	06.15	結論下書き発表・読み合いⅡ		⑤	
⑩	06.22	全体下書き検討Ⅰ		⑤	
⑪	06.29	「おわりに」付き下書き検討Ⅱ	最終レポート提出: 7/4 正午	⑥	
⑫	07.06	パーティ・レポート配布	評価表を出す	⑥	
⑬	07.13	相互自己評価①	もらった評価に返事 を書く	⑥	
⑭	07.20	相互自己評価②	もらった評価に返事 を書く	⑥	

2005 年度春学期 総合 3-6(水・3)

みちるべ Vol.02 ふたつの「D」 I -おいしいハンバーガーの構造^{こうぞう}

さあ、いよいよ「対話レポート」を書く活動がはじまります。
あなたは、今まで、どんなレポートや作文を書いたことがありますか？
「総合 3-6」の「対話レポート」は、
「ふたつの D」のハンバーガー。
おいしいものは、ふたつの「D」。



でも、ハンバーガーは、おいしいパテだけではできません。
いい「パン」がなければ、
そして、おいしい「あじつけ」がなければ、
味わいのあるハンバーガーはできません。

さて、レポートの「テーマ」はみつきましたか？
あなただけの味わいのあるレポートを
ぜひ、読ませてください！

みちしるべ vol.3

*** 動機ってなに？ ***

いまなに かんしん
今何に関心がありますか。

いまなに きょうみ
今何に興味がありますか。

いま おも
今したいと思うことはなんですか。



みつかりましたか？

じゃなぜそのテーマなのですか

なぜ興味・関心があるのか、なぜ好きなのか

「あなた」のことばで説明してみよう。

「なぜこのテーマか」と自分にといかけてください……



2005 年度春学期 総合 3-6(水・3)

みちるべ Vol.04 ^{どうき}動機をみつめる —「オリジナリティー」の^{はなし}話

^{いっぽんらん}「一般論」といふことは、聞いたことがありますか？

人と話したり、本や新聞を読んだり、テレビなどから、

^{わたし}私たちはいろいろなこと、^{うしき}知識を学びます。

でも、「知識」ばかりの話を「つまらないなあ…」と思ったことはありませんか？

「本に書いてあった」とか、「みんなそう^{おも}っている」とか…

このようなことばには、話している人の^{かお}「顔」が見えませんか。

そんな「一般論」はちょっとつまらない…。



私たちは毎日の生活で ^{まいにち}何かを見たり、^{せいかつ}やったりして、
^{かん}何かを感じ、^{こころ}心の中に^{おも}「思い」を^{すこ}少しずつ増やしています。

「動機」を書くときには、

あなたがレポートの「テーマ」を選んだ^{えら}「私の心」の中をよく見てみましょう。

そこには、あなただけの「思い」が、きっとしまわれているはず！

それが、「オリジナリティ」というものです。



「どうして私はこれ(テーマ)が気になるの？」

「どうして私はそう思うの？」

「それ(テーマ)と私はどんな^{かんけい}関係があるのかな？」

と繰り返し考えてみましょう。

そのとき、あなたの思いをまとめるのには、

「私にとって〇〇は、～である」

という「^{かた}仮説」がきっと助けになってくれますよ！

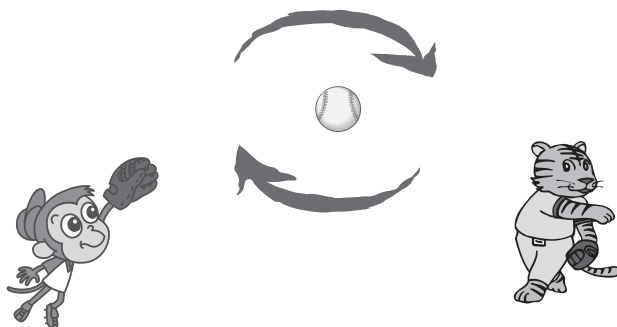
2005 年度春学期 総合 3-6(水・3)

みちしるべ Vol.05 ^{だいわ} ^む 対話に向けて

キャッチボール

あなたのテーマについて ^{いっしょ} ^{はな} 一緒に話したい人って ^{だれ} 誰?

その人と ^{ことば} のキャッチボール (ディスカッション) してみよう。



ステップ1: ^{じゅんびたいそう}準備体操

^{あいて} ^{だれ} 相手は 誰が いいかな? みつかった? どうして その人が いいの?

ステップ2: キャッチボール

^{さいしょ} 最初に あなたのボール(^{かんが} 考え)を ^な 投げてみよう。

^{あいて} 相手からのボール(^{かんが} 考え)も ちゃんと ^う 受け止めないだね。

あなた → 相手 → あなた → 相手…… ^{なんど} 何度も、じっくりね。

そうしたら 私と相手の ^{おな} 同じところ、 ^{ちが} 違うところ いろいろ見えてくるよね。

^{さいご} 最後には 新しいあなたのボール(^{かんが} 考え)が できるはず。

みちしるべ Vol.6 「対話」の報告

対話の相手と何を話しましたか？

ステップ1

対話の相手とどんな話をしましたか？

対話を通して、あなたの考えがどんなふうに

変わったり、固まったりしましたか？

対話の内容を

クラスの人にも、ぜひ教えてください！



ステップ2

それを聞いたクラスのみんなからもアドバイスをもらいます。

そのアドバイスをもとに考えると、

さらに説得力のあるレポートが書けるでしょう！

みちるべ Vol.7 「対話」報告からの展開

対話をまとめる

あなたが対話の相手と話をしたとき、
どんなことを考えましたか？

その内容をクラスで報告したとき、
クラスメイトから、どんな意見をもらいましたか？
そのとき何を考えましたか？

そして、対話と対話の報告をした結果、
どんなことを考えていますか？



対話の内容をまとめるとき
「話したこと」だけでなく、
あなたが「考えたこと」を書くのが大事。
対話や対話の報告をふりかえって
もう一度考えると
そこから「結論」が見えてきます。

みちしるべ Vol.8 アクティブ・エバリュエーション I. - アクティブ・リーディング

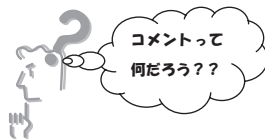
アクティブ・リーディング

「^{けつろん}結論」が書けたら、クラスメートと^{よあ}読み合いをし、

^{たが}お互い^{だあ}コメントを出し合いましょう。

ところで、あなたはコメントをするとき、どんなことに^き気をつけますか？

いいコメントってどんなコメントだと思いますか？



コメントをするとき、^{だいせつ}3つの大切なポイントを思い出して！

そう、オリジナリティ・インターアクション・^{いっかんせい}一貫性 でしたね。

その人が、テーマについて、ほかの人と^{いけん こうかん}意見を交換し、

^{なに}何を、どのように、^{かんが}考え、

どんな^{けつろん}結論を出したのかが、よくわかりますか？

よくわからないなら、それはどこ？それはどうして？

そのことをコメントしてください。



クラスメートのレポートを読むとき、^よ3つのポイントを

^{かんが}考えながら、^{あじ}味わって^よ読む＝アクティブ・リーディングをすると、

あなた^{じしん}自身がレポートを書くときにも役立ちます！

みちしるべ Vol.9 アクティブ・エバリュエーションⅡ アクティブ・リスナー

アクティブ・リスナー

アクティブ・リスナーって何(なん)だろう？

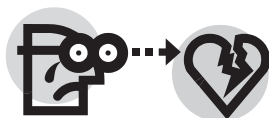


クラスや BBS で仲間(なかま)からたくさんコメントをもらいます

そのときあなたは どうしますか？

言(い)われたとおり？

気(き)にしない…？



ちょっと待(ま)って！！

仲間(なかま)がくれたコメントをよ〜く考(かんが)えてみましょう

そして、あなたが考(かんが)えたことをもう一度(いちど)、ことばにしてみましょう

そしたら、またコメントが返(かえ)ってきます

また、そのコメントを考(かんが)えてみましょう



ただ聞(き)くだけじゃダメ！

聞(き)いて、考(かんが)えて、ことばにする！

そうすると、オリジナリティあふれるレポートが書(か)けます

あなたはアクティブ・リスナーですか？

Active Writing

オリジナリティ

わたしに
とって
〇〇は
～である

動機

動機

インターネットアクションの受容

対話

考え

対話

考え

対話

考え

対話

対話

最初に

たてた動機から

対話をとおして

考えて

もういちど

ことばにしてみよう

わたしにとって

〇〇は～である

あなたの

大切な

ひとつのテーマをめぐって

動機、対話、結論・・・

このプロセスにおいて

考えは

どのような

道筋をとりましたか

それを論理的に

説明してみよう

論理的の一貫性
(ろんりてきいっかんせい)

わたしにとって
〇〇は～である

結論

結論

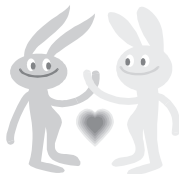
みちしるべ Vol.11 ^{じぶん}自分と^{たいわ}対話

～世界にたったひとつのわたしのレポート～

このレポートの作成^{さくせい}をとおして、
^{じぶん}自分の^{えら}選んだテーマと^{じぶん}自分の^{かんけい}関係について
たくさん^{かんが}考えましたね。

^{かんが}“考^{かんが}えるって自分と^{じぶん}対話^{たいわ}をすること”

わたしの^{かんが}考^{かんが}えがつまったこのレポートは、わたし^{じしん}自身。
^{さいご}最後に^{できあ}出来上がったレポート^{ぜんたい}全体を^{みわた}見渡して
もう一度、わたし^{いちど}のレポート＝わたし^{じしん}自身と^{たいわ}対話してみしょう。



そうしたら、^{せかい}世界にたったひとつの
わたしのレポートの^{できあ}出来上がり！

みちしるべ Vol.12 アクティブ・エバリュエーションⅢ <他者の受容>の話

説得力のあるレポートってどんなレポートだろう？

「総合」のクラスでは A さんと B さんがレポートを書(か)いています。

A さんは、みんなからたくさんコメントをもらっても知らん顔(かお)。

「私のレポートなんだから、私だけがわかればいいの！」

自分(じぶん)の書きたいことばかり書いていました。



その結果(けっか)、

A さんのレポートは A さんにしか分(わ)からないレポートになってしまいました。

一方(いっぽう)で...

B さんは、みんなからもらったコメントをよ〜く考(かんが)えて、
レポートを書くことをしました。

書く→コメントをもらう→考える→書く

何度(なんど)も何度(なんど)も、くり返(かえ)しました。



その結果(けっか)

B さんのレポートは誰(だれ)が読(よ)んでも分かるレポートになりました。

さて、

A さんと B さん、どちらのレポートが説得力(せつとくりょく)のあるレポート

だと思いますか？